
遊戯王 霊使いの一存、HERO達の憂鬱

サイコロサーチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 霊使いの一存、HERO達の憂鬱

【Nコード】

N7268S

【作者名】

サイコロサーチ

【あらすじ】

理由もなにも告げられず遊戯王5D・sの世界に跳ばされた小鳥遊雪姫。手元にはE・HEROデッキ。そして傍らには霊使い達のカードの精霊。いつか犯人に一撃ぶちかます為に、力を合わせデュエルアカデミアでドタバタな毎日を繰り返す何故かデュエルが少なめな学園コメディ。

ダルク？ 知らないな。

ガールズラブあります。

こんなの絶対おかしいよ！

たかなしゆき
小鳥遊雪姫が目覚ますと、そこは豪邸（推定）だった。

まるで意味がわからんぞ！！

脳内の返り咲キングが何やら叫びを上げたが、そも雪姫自身まるで意味がわからない。

昨晚、彼女が眠りに就いた自宅は、あばら家よりは幾らか整備が行き届いている、程度の家だった筈だ。

「誘拐……？」

考えがそこに至った瞬間、残っていた眠気など消し飛んだ。

「冷静に、私冷静に……！」

奇数を数え《人》の字を飲み込む。

色々と間違っているが、この際気持ちさえ静まれば、形式などどうでもいい。

「小鳥遊雪姫、15歳」

両親が亡くなって以来の独り暮らし。ぶっちゃけ極貧。だが、敢えて清貧と言い張っている。

趣味はデュエルモンスターズ（10割は某蟹並みに友人の余り物か、

カードは拾った）

そしてそれなりにディープなオタク趣味（昭和の人間張りに友人宅のTVやPCに寄生もとい間借りした）

そこまで一気に思いだし雪姫はほっと息を吐く。記憶の混濁は無いようだ。

次いで雪姫は急いで周囲を探る。

フワフワという擬音が聞こえてきそうな、少女趣味全開なぬいぐるみ等の数々。

そして豊富なオタグッズ。

「うん。ストライク」

大丈夫、もう何も怖くない、と満足気に頷き雪姫は有り得ないくらいに心地良いベッドで再び眠りに就いた。

「いや、そのりくつはおかしい」

だがすぐに意味不明な呟きと共にムクリと起き上がる。

そして今度は落ち着いた仕種でクロゼットを漁り出す。

「学生証？デュエルアカデミア？」

せかいのほうそくがみだれる。そんなナレーションが頭の中で響いた気がした。

その服は本来コスプレ以外で着ることは有り得ない。

「学生証までついて凝ってるなー」

収められている自分の写真にはこの服を着た自分が写っているが、雪姫はこんなコスプレをして無愛想な表情で写真を撮った記憶など無い。

この時点で彼女には自分の身に起こった現象の見当はついていた。だが受け入れられる筈もない。

だから窓の外には『ダイダロスブリッジ』などは見えないのだ。見えないいったら見えないのである。

ダルクって、ホントソス

「「な」にかな、な」にかな？」

「今回はこれ」

？《禁じられた聖杯》

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。

「うーん。これなら《デーモンの斧》や《突進》を使ったほうがよくないですか？」

「そう思うのがしろうと。思わないなら訓練されたしろうと。その真価は本編を見ればわかる」

「ワインとライナの奴ら誰に向かって話してたのかしら？」

前回までのあらすじ

「これもディケイドって奴の仕業なんだ」

何だって！？ それは本当かい！？

おのれディケイドオオオオオオオオ！！

世界の破壊者ディケイド！この世界を（ry

聞いていた通りだな、悪魔め！

どこかで馬鹿どもが騒いだ気もするが、雪姫は気にしない。

気にせずに枕元に置いてあったカードデッキを調べる。

この状況で？という気もするが仮にもカードアニメの世界に跳ばされたのだ。

そしてそこにあからさまに置いてあったカードデッキ。少しでも冷静さを残した人間であれば疑って然るべきだろう。

当然、比較的冷静さを保っている雪姫も真つ先に疑った。

ましてこの世界、遊戯王なら『いつものこと』。

そう思考を廻らせつつも、その視線は忙しく犯人（候補）のデッキを検分する。

内容は『E・HERO+霊使い』という奇天烈な様な、噛み合っている様な良く分からない混成デッキ。
というよりエセメンタル

まあ、某タッグフォースの某ディマおつと誰か来たようだ。

もつとも、ここにあるデッキは未完成なのか40枚に届いていない。或いは残りは自分で組め、という意味表示であろう。だがその中の1枚に無視できないカードを見つけてしまった。

「……って《超融合》？」

もしやこれが原因か？と、一瞬疑ったが、このカードからは特に危険な気配はしない。言ってしまうえば他と同じく紙とプラとインクの集合体。

詰まる所、この世界でもよくあるタダのレプリカと言ったところか。現時点にはあくまでも（候補）は外れそうにない。

……彼女は思考を進める。

ここは恐らく遊戯王の世界。

しかもデュエルアカデミアの制服のデザインからして多分5D・s。

まあアニメか漫画かゲームかまでは解らない。

「よし、なにひとつわからない」

もともと、わからないことがわかったただけでもこの状況下では僥倖ともいえようが。

と、は言え――

「この妙ちくりんなデッキをどうしろと？」

「同感ではあるけど、無論、それは僕達が入っていることに対してではないよね？」

沈黙の後、雪姫は目を反らす。

眼前のいつ入ってきたかわからない少女から。

「コスプレは間に合ってますから」

少女の服装は、まんま手元のカード、地霊使いアウスであった。

「確かに僕が君の立場なら確実に同じ対応をするだろうね。

むしろ異常事態を場の空気に流されて無条件で受け入れない点は評

価にさえ値する」

知的で冷静な、そしてややシニカルな笑顔。

年の頃は雪姫と同じか少し上といったところか。

もつとも、その豊満な体つきは確実に歳不相応というか。まあ何というか、同性の雪姫でさえ目の毒であった。

本人がそれに無頓着なところが尚、扇情的に魅せている。

「……気に入ったのはいいけど、長い。しかも無駄に」

機嫌良さに語る少女の声を更に別の声が遮る。

今度はヒータだろうか。

露出が多い、アウス（仮）とはまた違った意味での目の毒だ。

「効率的だの合理化だの煩いのはアウスでしょ？」

「勘違いしないでくれないかな？僕は非効率は嫌いだけど、無駄な理論展開は大好きなんだ」

「無駄に洗礼された無駄の無い無駄な理論……って言うてる場合じゃないでしょうが！」

雪姫は溜め息を吐く。

仲良きことは美しいかもしれないが、美しければ良いというものではないと思うのだ。

そんな思いを汲み取ったのか

「……とうっ」「」

突如部屋に飛び込んできた謎の2人組。そしてその後をオタオタと着いてくる髪の長い少女。

突然の乱入者3人はそれぞれが謎のポーズをとってかつこよく名乗り口上を叫ぶ。

「風グリーン！」

なんとも言えない荒ぶるガスタのポーズを決める緑な人。

「光ホワイト！」

光魔法カッコいいポーズの白い人。

「み、みず、ぶ——」

……………おいやめろ

「……………惨い事を」

可哀想に。雪姫にはこれ以上見ていられなかった。

「もう止めろ！それでも仲間か！」

「あなたたちは仲間を傷付けるような奴等じゃなかった筈でしょ！」

他の2人も悲痛な声で訴えかけたのは言うまでもない。

「見なかった。私はなにも見なかった」

3人へと、いうかライナとウィン）の暴走は雪姫の心に深い傷を残してしまっただようだ。

「……認められないのも無理もない。この世界には精霊なんていう面白おかしいものはそんざいしない」

「私達を面白おかしいと認めるのもあれですけどね」

「そうだね。ライナあたりは存在自体面白おかしい気もするけど」

「酷い！？酷いを通り越して非道い！？」

「っていうか寧ろあなたたちの三文芝居を見なかったことにしたいんじゃない、これ！？」

何やら脱線しかかっている霊使い達（認めてしまおう。霊使いの力ードの精霊である）。

そこには案の定、彼女にとっての永遠のアイドル、霊使い達が居た。

「ダルクソス」

ついでにそんな一言も自然とこぼれた。

「つまり、皆はいつの間にかデツキとして組まれていて、それを誰が組んだかは分からない。そしていつの間にか私の手元に置かれていた……と、言う事？」

雪姫は予想以上に絶望的な状況に臍を噛む。

超自然的存在である彼女等カードの精霊。

何らかの解決の糸口になるかと思いきや、彼女達とてむしろその立場は自分と同じ被害者のそれであったのだ。

それならばただの人間である自分に何が出来るというのだろうか。

だが――

（だけど……）

無力なんて諦める理由になんてなるわけない。

（明日またね、って）

あの強気で、自分に対してすぐにお姉さんぶるうとして、なのに少しでも泣き虫で、ちょっとだけ情けないところのある彼女と。

不可能を覆す理由は、それだけで十分だ。

だから彼女は思考する。その為の鍵を、思考の海から拾い上げる為に。

今まで以上に早く、そして精緻に、鋭敏に。

そんな彼女を見て、アウスは少しばかり驚いた。

この状況で、精霊が見えるというだけの、ごく普通の少女が、怯むことなく冷静に状況を分析しているのだから。

ヒータは少しだけ笑った。彼女は今がいかに困難かを理解している。理解して尚も進もうとする。それは怯えを知らない蛮勇など及びもつかぬ意志力が必要だ。

（（気に入った））

アウスとヒータの思考は図らずも重なった。

そんなことは露知らず、雪姫は自分の推察を口にする。

「…………おそらく」

そう付けつつも雪姫は半ば確信していた。

「私たちが帰る鍵になるのは《デュエル》」

「と、言うより《このデッキを使った》そして《デュエルアカデミアでの》と限定したほうがいい」

確かにここまで御膳立てされて、その二つのキーワードがまるで関係しないなどとはあり得ない。

「つまり……今は、この状況を作った相手の思惑はともかく——」

「ああ。否応なくそれに乗るしかない」

アウスはシニカルな笑みを浮かべる。

「それでいつかはブツ飛ばす。5人分まとめてね」

それに乗るかのようにヒータも好戦的な笑顔を作った。

「雪姫さん、朝ごはんが出来ました！」

雪姫たちは、思い切りずっこけた。

「エリア……空気、読みなさいよ」

「空気を読むのは私の仕事……風属性なだけに」

「うまくない。そして説得力がない」

呆れたようなヒータの反応にウインは勝ち誇ったかのように笑う。

「ふつ……そう思うのが素人の浅はかさ。今、マスターは空腹。これからの事を考える前にまずは今のコンディションを整えるべき」

「だめですよ、先輩！これからを考えてあつくするのはいいけど、今はまだマスターも混乱してることを忘れちゃ先の事どころじゃなくなっちゃいます！」

ウィンとライナの言葉に、アウスとヒータは失礼ながらも愕然とした。

「まつ……まさかウィンとライナが本当に空気を読んだ！？」

「と、いうかあんた等が食事用意したわけじゃないのに、なんでそんな上から目線なのよ！しかも妙に正論なのが腹立つし！」

「発案、私」

「わたしはそれを見ました！」

「ウインは兎も角ライナは待て！！」

「……？今、マスターって？」

虚を突かれたように呆けた声を出す雪姫に、ライナは満面の笑顔で、ウインはしてやったりといった表情でVサインを決めた。

「くつき、よみました」

「よみましたっ！」

そんな2人の仕草に、雪姫もはにかんだ様な笑顔を返す。
そんな彼女達にアウスとヒータは負けたとばかりに苦笑するしかなかった。

制服を着込みつつ雪姫は嘆息する。

制服は小柄な雪姫の瘦躯にも寧ろ違和感を覚えるほどにぴったりだった。

だが今更その程度は気にすることもないだろう。

大体が異世界に連れてこられるなんて時点で今更なことではある。

ちなみに朝食はとてもおいしかった。エリアの料理の腕は、驚くほどだった。台所でやたらと白い包丁やデロウスの牙製の包丁を見た気もするがきつと気のせいだろう。

ただ、惜しむべきは雪姫の身体があまりの高級食材を前にアレルギー反応を起こしてしまったことだろうか。

ちなみにそれを見た精霊一同はなぜか涙が止まらなかったという。

「たかなしゆき小鳥遊雪姫です。よろしく願いします」

デュエルアカデミアは丁度、今日が入学式であった。雪姫達にすれば有難い話である。

軽く自己紹介を済ませ席に着く。

なんとも壮観である。

視界にはゲームやアニメで見た事のあるキャラない様なキャラまでズラリ。

まあ、当然と言えば当然だが。

クラスメイトにはツァン・ディレや原麗華を発見した。

と、いうかツァン・ディレは隣の席。

リアルだと本気で可愛いなあ、とちよっただけ感動しつつも、少しばかりの鬱が思考をよぎるのは仕方がない。

なにせ彼女は親友と同じ私立高校に進学するために必死で推薦を勝ち取ったというのに、現実はどうだろう。

本来であれば今日この日にその高校で入学式を迎えているはずだったというのに……

（どうしてこうなった……）

そんなことを無意味に考えていたら、雪姫のお腹がくう、と可愛らしく音を鳴らす。

そういえば高級品アレルギーの所為で碌に朝食を口に出来なかったことを思い出した。

それはお腹も空く筈だ。そう思いガサガサとカバンを漁る。

こんなこともあるのかと、エリアがビスケットをカバンに入れてくれたのだ。

だがそのビスケットの袋を見たツァンが驚嘆の声を上げる。

「そ、それは！」

ああ、そう言えば。雪姫は一人納得した。

「あの高級ビスケット『ブリューナク』！？」

絶対作ったのは『トリシューラ』と同じパティシエだとも思った。そのうち、グングニルあたりがシュークリームで出るのだろうか。

「食べる？」

彼女はゲーム内でもビスケットが大好物だったことを思い出し、何枚か差し出す。

正直、高級過ぎて雪姫はジンマシンでも出来そうで怖かったのだ。

「いいの！？」

「うん。お近づきの印にでも」

だがツアンは、ハッと何かを思い出したようなそぶりを見せると、なにやら良く分からない葛藤をしだす。

「い、いや、でも昨日ケーキを食べたばかり……って違うわよ!? 初対面の相手から食べ物をもらうなんて意地汚いと思ったただけなんだから!」

年頃らしい彼女の葛藤に、デッキの中の霊使い達も苦笑する。しかし……

「……たくさん食べたら太るの?」

彼女ははつきりいってお腹いっぱい食べた事など、ここ10年ほどでは殆ど無い。

ダイエットで絶食云々を話しているクラスメイトの会話など、彼女には異次元の内容であった。

寧ろ太る程食べてみたいというのが本音である。だが……

「なん……ですって?」

空気が軋みを上げて固まった。女子達の表情も引き攣る。

女生徒達の視線が物理的な圧力さえも伴って雪姫に集中する。

小柄だが、脚もすらりと長く儚げとさえいえる華奢な四肢。それは平素であれば男性のみならず同性さえも惹き付けるだろう。事実自己紹介から15分程度で既に何人かは性別関わらずちらちらと彼女に視線を送っていた。

そんな危うく、儚げな容姿を持つ彼女。

つまり、嫌味にしか聞こえなかった。

「^{デュエル}者ども戦争だあああああああ！！！！」

[illegible]

「なんで!？」

「すみません、マスター！今回ばかりはあちら側に着かせて頂きます！」

「マスターの極悪人！」

「ま、まぢにげぢう……!!」

「嫌味！？へそ出しルックで常に戦々恐々としている私への嫌味なの！？」

更には靈使い達まで向こう側に着きだしてしまう。そんな力オスに雪姫は混乱の境地へと至ってしまう。

誰も悪くない。だが争いとは得てして、悪人などいない状態からこそ起こるのかもしれない。

唯一、勘違いの内容を察する事の出来たアウスはカードの中で溜息を吐くのだった。

どうしてこうなった。雪姫は大事なことなので心の中で2回呟いた。

「さすが遊戯王。良く分からないデュエル脳のこの横行ぶり」

実はデュエル脳云々とはあまり関係ない状況ではあるが、それこそ関係無い話である。

雪姫は頭を切り替えてデュエルディスクを構える。

これが《このデッキを使った》そして《デュエルアカデミアでのデュエルの最初の一步。

これがきつと帰る鍵へと繋がっている筈。

否——繋げて見せる！

「「デュエル！！」」

2人の腕に付けたデュエルディスクがデッキをシャッフルする。

「先攻はボクが貰うわよ！僕は手札から永続魔法《六武の門》を発動！」

やはりか、と雪姫はその発動宣言を見送る。ツァンはゲームと同じく《六部衆》を使うようだ。

「更にボクは手札から《真六武衆・カゲキ》を通常召喚！効果により《六武衆の影武者》を特殊召喚！

六武衆と名のつくモンスターが召喚されたことにより《六武の門》に武士道力ウンターを4つ置く！

そして《真六武衆・キザン》と《六武衆の師範》を特殊召喚！更に武士道力ウンターを4つ追加！」

《六部衆》

高速展開能力と《六部衆》が並ぶことによつて使用できる数々の効果、そして豊富かつ優秀なサポートカード。

安定性と爆発力を兼ね備えた、現環境において最強のカードプールの一角。

それゆえ《六武衆》がまだまだこんなものではないことを雪姫はしっかりとわかつていた。

「そして武士道力ウンターを8つ取り除いて《真六武衆・ミズホ》と《真六武衆・シナイ》を手札に加える！」

ツアンが手札に加えたのは、除去効果とサルベージ効果を持ち、尚且つ互いの効果で特殊召喚可能なカード。

だがツアンはハンドアドバンテージの為か、或いは召喚手段が無かったのかフィールドには出さない。代わりに、更にフィールドを盤石なものにせんと動く。

「レベル3の《真六武衆・カゲキ》にレベル2の《六武衆の影武者》をチューニング！」

2体の六武衆がそのレベルと同じ数の星へと姿を変え、その星が連なり円環をくぐる。

「戦場^{いくわば}に血風踊る時、六武統べる将が今ここに進軍する——」

5連の星が再びその姿をモンスターへと変える。その姿は赤備えの鎧を纏う、荒武者の威風堂々たる立ち姿。

「出陣せよ！シンクロ召喚つ……《真六武衆・シエン》！！」

「これでボクは武士道カウンターを更に2つ置いてターンエンド」

手札の消費も激しかった為か、ツァンはカードを一枚も付せずにはターンを終了する。或いは六武衆の特徴である破壊耐性を考え、トップを温存したのか。だが何れにせよこの圧倒的な布陣の前では些細なことかもしれない。

六武衆を従える最強の武将。この一体が現れただけで、無機質である筈のフィールドが、正に戦場と化したのだ。

その赤備えの威容。そして兜の上からさえもはつきりとわかる程の殺気と威圧を宿す眼光。

これがソリッドビジョンだという事も忘れ、後ろにいた者達は我知らず一歩その足を退かせる程であった。

だが、その威圧感を直に受けている筈の雪姫だけは、一步も下がない。睨み返すでもなく、虚勢でもなく、ただ冷静に警戒したのみで、淡々と、フィールドを探るかのように見つめる。

（相手の手札は少なくとも《真六武衆・ミズホ》と《真六武衆・シ

ナイ》。もう一枚は不明)

単純な手札温存か、もしくはあのタイミングでは出せないモンスターカードか。

だがどちらにせよ、《真六武衆・シエン》の効果が雪姫のデッキにとって厄介極まりないのは確かである。

況してや相手モンスターは全て2000超え。更にフィールドの内、一体は身代わりによる破壊耐性と回数限定の魔法、罠の無効効果。一体は効果破壊をトリガーにしたサルベージを持っている。それにより《真六武衆・カゲキ》をサルベージされると、更に一気に3体の六武衆が並んでしまう。

(往年のファンデッキがよくもまあ……)

しかもそうなれば武士道カウンターによるサーチまで行われてしまうし、もしも次のドローカードに《六武衆の結束》や《団結の力》でも入っていればそれこそ状況は最悪に転んでしまう。

だが、六武衆相手であればこの程度は充分に想定内だと言っていい。雪姫にしてみれば、この上で更に《大將軍紫炎》を出される覚悟さえしていたのだから。

「私のターン、ドロー」

雪姫はドローカードと手札を見る。そして相手のフィールド、手札。このデッキの心臓ともいえる魔法、罠が一回しか使えない状況で如何にHEROを展開するか。

(なら、何度でも使えるようにすればいい)

「《真六武衆・シエン》を対象に速攻魔法発動《禁じられた聖杯》。シエンの攻撃力は400ポイントアップ」

「馬鹿な！態々攻撃力を上げるだど！？」

だが周囲の驚きとは対照的にツァンはこのカードのもう一つの効果を知っているのか、その表情を歪ませる。当然だろう。六武衆にとって効果を無効化するカードは最上級に警戒すべき対象なのだから。

「《禁じられた聖杯》を使用したモンスターは効果がすべて無効になる」

更なる攻撃力を得た《真六武衆・シエン》だが、真に恐るべきだったその効果を封じた今、自分のデッキであればいくらでも打つ手がある。そしてその手札を手にするカードも――

「私は手札から《E・HERO エアーマン》を召喚。効果によりデッキから《E・HERO ワイルドマン》を手札に加える」

エアーマンが起こす風が、デッキから1枚のカードを雪姫の手に呼び込む。

《E・HERO ワイルドマン》

強力なサポートカードと優秀な効果を併せ持つHEROだが、それでもこの1枚ではこの状況は覆すには至らない。

「手札から魔法カード、《融合》を発動」

だが元より《E・HERO》というカード達は、他のカードとの組

み合わせによってあらゆる窮地を打ち破る。

「手札の《E・HERO ワイルドマン》と《E・HERO エツジマン》を融合、《E・HERO ワイルド・ジャギーマン》を特殊召喚」

戦場に新たに立つのは、隆々とした体躯に身長ほどもあるうかという蛮刀を背負った、雄々しき戦士。

ワイルド・ジャギーマンはその背に背負った武骨な段平を抜き放ち、眼前に立ち並ぶ荒武者達に向け立ち構える。

攻撃力は2600。

2900の《真六武衆・シエン》には届かない。

だが雪姫は最初からワイルド・ジャギーマンだけで決着をつけるつもりもない。

「更に手札から《ミラクル・フュージョン》を発動」

風そのものと化したエアーマンがワイルドマンの身体を包み込む。

「墓地のワイルドマンとフィールドのエアーマンを融合して《E・HERO Great TORNADO》を召喚」

エアーマンが変じた風が更にその勢いを強め、巻き上がる砂塵はフィールドを暗く包み隠さんとばかりである。

その暴風の中を悠然と歩む巨大な人影。

「Great TORNADOは、融合召喚された場合、相手フィールドのモンスターの攻撃力を半減させる」

外套を翻し、吹き荒ぶ嵐を従えて、Great TORNADOはその名を体現するような威風で六武衆を打ち据えた。

「タウン・バースト」

雪姫が淡々とした声で宣言をした瞬間——空が墜ちた。

ダウンバースト。大気そのものが破壊鎚と化して、ツアン側のフィールドを叩き潰す。

流石と言うべきか、六武衆はそれでもその人知を超えた猛威を耐え、凌ぐ。

しかし盤石であつたはずの陣形は崩され、その武威を見ることはもはや敵わない。

「嘘でしょ……？」

その状況にツァンは戦慄した。戦闘力を半ば失われた自分の場のモンスター。

そして相手の場にはワイルド・ジャギーマン。

ワンターンキル。その言葉が絶望的にツァンの脳裏によぎる。

そしてその言葉を覆すカードなど、ツァンの手札にはありはしない。

「ワイルド・ジャギーマンで攻撃。インフィニティ・エッジ・スライサー！」

ワイルド・ジャギーマンが嵐を引き裂くように、猛然と躍り掛か

る。

巨大な段平が反応さえも許さずに《六武衆の師範》を真一文字に叩き切る。

残りライフ2450

二太刀。剛力で無理やりに剣閃を反し、どうにか構えることのできた《真六武衆・キザン》を胴薙ぎで真文字通り薙ぎ払う。

残りライフ600

そして最後に狙う《真六武衆・シエン》を真っ向からの打ち下ろしを以て構える刀など意にも介さず諸共に屠り去った。

残りライフ0

そしてその一撃が、ツァンの敗北を決定づける最後の攻撃となった。

「ま、負けた……しかも1ターンで？」

なにやら影を背負うツァンを気の毒に思いつつも、雪姫にはふと気になった事が有った。

「少し、デッキを見せてもらってもいい？」

「何？負けた相手のデッキを見て、嫌味でも言ってやろってわけ？」

恨みがましいツァンの視線を無視して、そのデッキを借り受ける。デッキを捲った雪姫は何も言えなかった。

《六武衆の結束》

《大將軍 紫炎》

《一族の結束》

「このターンで決着をつけて良かった……」

雪姫は心の底から呟いた。

「ごめん。そんなに重要な問題だったなんて」

その後、勘違いを知らされたツァンから決死の形相で『女の子の常識』を叩きこまれた雪姫は、土下座せんばかりの勢いで深く謝罪する。

終わってみればギャグとしか思えない話で済んだが、内容によっては本当に人を傷つけてしまう事とあるのだ。

それゆえに勘違いだから、で済ますようなやり方を雪姫はひどく嫌

っていた。

そんな彼女の生真面目さが何となく感じ取れたのだろう。ツァンは苦笑すると

「まあ、あんたが女の子以前だって分かったからには、ボクがしつかりと『女の子らしさ』を叩きこんであげるよ」

それだけ告げると、恥ずかしくなったのかそっぽ向いてしまう。そんな彼女の言葉が、雪姫はともうれしかった。

「……ありがとう」

自然とそんな言葉を返していた。

孤児であることとこの無表情の所為で、あの親友以外とは碌に友達がいなかった。

それがこうして異世界で久しぶりに新しい友人が出来る。本当に世の中は儼ならないものだ。

だが、いつになるかはまだ何も分からないけれど、せめて帰るまでは、この友達を大事にしよう。

それだけを誓って雪姫は静かに微笑んだ。

もっともその当の友達はますます真っ赤になって俯いてしまったが。

サッカーよりも超次元デュエルやろっぜ！

「な〜にかな、な〜にかな？」

「今回はこれ」

？ 《機械複製術》

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する

攻撃力500以下の機械族モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターと同名モンスターを2体まで自分のデッキから特殊召喚する。

「たかが500と侮るなかれ。効果は地味だけどいろいろと応用がきくいいカード」

「なんで龍亜くんはこういう強力なカードをいれてないんでしょう？」

「……もうやめたげて」

「……えつと？」

波乱だらけの初日を終え、家路に着いた雪姫。

辿り着いた門の前に、女性が倒れていた。

「冒頭からこれだよ」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

「生き倒れ……ですか」

口の中いっぱいにご飯を頬張っている為か、こくこくと肯くミサキと名乗る女性。

年の頃は雪姫より少し上と言ったところだろう。

「そして記憶も無いと」

「そう」

それだけ聞くとかなり深刻な事態の筈のだが、どうにも本人のぼんやりとした空気のせいか、今一危機感を感じられない。

それに雪姫は彼女を見ていると何となく違和感があった。

そのせいだろうか。彼女自身、思いもよらぬ言葉を発したのは。

「それじゃあ、この際ここに住みませんか？」

「ちょ——マスター!？」

予想だになかった提案に、寝耳に水とばかりヒータは思わず聞き返す。

「どうせ部屋はあり得ない位余ってるし」

寧ろ、霊使いsやミサキに個室を与えても余りまくっている。だが無論、ヒータが言いたいのはそういうことではない。

「そうじゃなくて!どう考えても怪しいでしょ、私たちも普通に見

えてるみたいだし！」

「それにこのまま出て行って生き倒れだなんて、寝覚めも悪いし」

「む……そりゃそうだけど」

それを言われるとヒータも弱かった。もとよりあまり熟考というものが苦手な彼女は、精神論や感情論に出られると今一弱い。ヒータは救いを求めるように周囲に視線を送る。

「ん……私は構わない。何だか他人の様な気がしない」

とても納得できる意見だった。むしろ実はウインの親戚ではないかと言っくらい、この2人は醸し出す空気が似ている。

「……でしょうね……エリア？」

「私も構わないかと思えますよ。マスターが何の御考えも無しに言いだしたとは思っていませんから」

「右に同じ。それに僕としては、怪しいというのならなおの事、目のつくところにいて欲しい」

「大丈夫ですよ、ヒータ先輩！ご飯をおいしく食べる人に悪い人はいません！」

「うん……エリアとアウスがそう言うなら」

「またこのパターン！？」

意見がまとまったら、やいのやいのと賑やかになる霊使い達。既に部屋割りや家事当番まで決め始めている彼女達を他所目に、雪姫はどうにもミサキに対する違和感が拭えなかった。

それがミサキをこの家に招いた理由でもあるのだが……

「どうにもミサキさんを見た事がある様な……？」

まあ、遊戯王のキャラも大概な数なのでそのうちの誰かかもしれな
いが……

「まあ、悪人じゃ無かったとは思うけど……」

だが、実はその違和感は当たっていた。

彼女の名はミサキ。

確かに悪人ではないが、味方でもない。

DSに出てきたアンチノミーポジションのオリジナルキャラだった
のだから。

だがプレイしていない彼女がそれを知る由もなかった。

そしてこの出会いが良くも悪くも物語をひっかきまわすなどと言う
事も。

あれから1週間ほどたつ。

なんだかんだで奇妙な共同生活をみんな楽しんでいた。

特に家族と言うものが居ない雪姫には、この生活は新鮮に感じられる。

それにこの1週間で色々と分かってきた事がある。

例えばエレベーター式であるデュエルアカデミアの高等部には2種類の生徒が居ること。

即ち初等部、中等部からのエレベーター組と外部からの編入組である。

麗華は前者、雪姫やツァンはどうやら後者の設定らしい。

「……それが自信満々に迷った理由？」

「うつ……そ、それは……」

「目を見てごらん？」

「ごめんなさい」

そう。次の授業に行く筈が、さんざん迷った挙句……

「君達は？」

クールな宮下ボイスにカニとしか形容できない髪型のイケメン。

「今日だったんだ、遊星がアカデミアに来たのって」

多分ハイトマン教頭が頭のネジを締め直される回だ。

と、いうかこの教頭は、学期初めから僅か1週間も満たないうちにこんな事をしていたのかと思うと流石に溜息をつきたくなる。

「ものすごく見られてるね」

「ほ、ホントごめん！」

あのゲームでも素直じゃないツアンが冷や汗だらだらで謝るのも無理はないだろう。

そりゃあ、ただの新生であるツアンからしてみれば、現デュエルキングである遊星とフォーチュンカップ第3位のアキに怪訝な顔で見つめられているのだから。

まあ、龍可に限っては、雪姫のデッキから精霊の気配がやたらするのが原因だろうが。

「すみません。教室を間違えました」

教室の空気が異様な原因を聞いたツアンは思わず叫ぶ。

「はあ！？無茶苦茶じゃない！」

まあ、ツァンの反応は至極尤もだろう。と、いかいくらデュエル至上主義のこの世界でも、一般的な感性を持つ人間で有れば普通の反応である。

だが原因であるハイトマンはどうやら普通ではなかったようだ。

「ふう……先程の十六夜アキさんといい、こんな落ちこぼれを庇いに授業をドロップアウトしてくるなんて……嘆かわしい」

「だーかーらー！ボク達はまだこの前編入したばかりだから、ちょっと迷っただけだってば！」

「編入組い？編入組の実力なんてたかが知れているであります！流石、落ちこぼれは落ちこぼれを知る、でありますね」

ハイトマンの暴言に、ツァンの表情が完全に怒り一色となる。当然、遊星やアキもその怒りを更に深めたようだ。

「おい、デュエル」なんですって！？雪姫は1ターンキルするくらい強いんだからね！」「……」

お得意のセリフを遮られて、少し淋しそうな遊星を他所に教室が俄かにざわつく。当然だろう。初等部の彼らからすれば、1ターンキルなどというのは夢物語に近いのだから。

「あのデュエルキングが出るまでもないよ！雪姫だったらあんたなんて余裕だもんね！」

「……それで私がデュエルすると」

何やら勝手に決まってしまったがいいのだろうか。

ここは本来では遊星が天兵達のカードで組んだローレベルデッキにより、ハイトマンに低レベルカードの大切さを教える、という流れだった筈だ。

だが雪姫のデッキは別に《ローレベル》や《チューナー》ではない。無論、そういうデッキの存在や組み方程度は知っているが……

「マスター」

「？」

いつの間にカードから出てきていたのだろう。

ウインの声がしたので振り返る。精霊が見える龍可も同じく振り返った。

「かに！」

「くくくくぶふう！？」「くくく」

遊星の背後に回っての今は懐かしきダブルピース。

ウインの渾身の一発ギャグに龍可や霊使い達は盛大に噴きだした。

ヒータに至っては余程ツボに入っただのか、カードの中でヤバ気な痙攣まで起こしている。

噴き出さなかった雪姫とて、生来の無表情で分かりづらいただけで、心の中では大爆笑しているのだ。心のキーボードのwを押しっぱなし状態なのだ。

「お、おい？龍可、大丈夫か？」

「ご、ごめん、遊星、今はちょっと顔見せな「エビラ！」——げぼつげぼつぶふおお！！！」

いきなり笑いだした龍可を心配して近づく遊星だがそれは逆効果である。

更には自身のツインテールを遊星の後頭部にくつつける禁断のネタ「エビラ」が止めを刺した。

「んぐぐぐぐぐ！！お前達は私の事を馬鹿にしているではありませんか！！良いでしょう！不動遊星の前にそこの落ちこぼれから叩き潰してやるであります！」

「「あ」」

そしてウインの反則技で2人はハイトマンの事をすっかり忘れていた。

「……ウインには後でしっかりと『OHANASI』しておくから」

「はい」

「？」

「「デュエル！」」

雪姫は気を引き締め直す。デュエルが始まったからには全力だ。

「モンスターをセット。そしてカードを3枚伏せてターンエンド」

雪姫はほんの一瞬手札を確認すると、何の逡巡も無く一気に4枚のカードをフィールドに吐き出す。

「だ、大丈夫かな？何か殆ど手札を見てなかった気がするけど」

「大丈夫だ。恐らく彼女の頭の中では既にデュエルの流れが組み立てられている」

確証は無い。だが遊星の感が告げている。彼女はその場の手札に任せた場当たり的なデュエルはしないと。

「私のターン！」

そしてハイトマンのターン。

「ぬふふ……！！来ました来ました来ましたよぉ！」

余程手札が良かったのだろう。ドローしたカードを見て、ハイトマンは奇妙な笑い声を上げる。

もつとも、その内容がアニメ通りだとすれば、雪姫にはいつそ芸術的なレベルの手札事故の気もするのだが。

「私は《古代の機械石像》を召喚……！」

フィールドに召喚されたのは機械仕掛けの胸像。

「機械なのか石像なのか」

『黄金の鉄の塊で出来た機械の石像なんだよ、きっと』

雪姫とアウスの馬鹿な掛け合いなど耳に入らないのか、ハイトマンは悦に入った表情で自分に酔う。

「さて……これから私がこのレベル2のモンスターを使って特別授業をしてあげましょう」

「特別授業？」

雪姫はその内容を知っているが、取り敢えず付き合っておく。その反応に更に気を良くしたのかハイトマンは周囲の鋭い視線を無視して更にその演説を続ける。

「低レベルモンスターを幾ら召喚してもデュエルに勝つことはできません！」

「まあ、それは別にレベルは関係なく出ただけじゃ勝てないと思いますけど」

雪姫の身も蓋もない発言にハイトマンも思わずつつこける。

「シャラップ！そこっ！話の腰を折らない！とにかく！低レベルモンスターの正しい使い方とはこういうものなのである事を教えてあげましょう！」

ハイトマンは手札から魔法を発動する。

「魔法カード《機械複製術》を発動！デッキから攻撃力500以下の機械族モンスター、即ち《古代の機械石像》を2体特殊召喚する

であります！」

《機械複製術》の効果で、機械仕掛けの胸像が更に2体現れる。

「同じモンスターが3体!？」

「ここで《古代の機械石像》の効果を発動! 《古代の機械石像》をリリースして、手札の《古代の機械巨人》を、召喚条件を無視して特殊召喚するであります!!」

《古代の機械石像》の代わりに姿を現したのは見上げる程の巨体を持った正しく巨人。

《古代の機械巨人》

優美とは程遠い錆ついた姿と刻まれた無数の傷は、その1つ1つが古よりの戦場を駆け抜けた証であろうか。

重苦しい駆動音と共に動きだす武骨な四肢は、青眼の白龍さえも超える圧倒的戦力を秘めている。

「ア、古代の機械巨人が3体……!」

龍亜の声が知らず震える。当然だ。彼の闘った地縛神でさえも及ばぬ攻撃力のモンスターが同時に3体。

そのモンスターを従えたハイトマンは既に勝利したかのように声を高める。

「このように低レベルのモンスターはハイレベルのモンスターの素材にするしか役に立たないのであります!」

しかし、その言葉が――雪姫に火を付けた。その名前に反するようにじりじりと焼けるように。

「素材にする『しか』？」

誰にも聞こえないほどの小さな声で呟く。その瞬間、雪姫の空気が変わった。

「貴方達低レベルのデュエリストもエリート達の為にリリースされるしかないであります！」

しかし既に雪姫は彼の御託を聞いていない。彼女は特殊召喚にチェインして伏せカードを発動する。

「罨カード《威嚇する咆哮》。このターンはバトルフェイズを行えません」

成程、《古代の機械巨人》の効果を満点と言っていいほど巧みに封じてきた。《古代の機械巨人》の魔法、罨を封じる効果や貫通効果は攻撃時にこそ発揮される。

だがバトルフェイズに入らなければ、破壊耐性を持たず墓地からの特殊召喚も出来ない《古代の機械巨人》はその脅威を一気に減ずる。

「ぬがつ！？ちょこざいなー！！手札から《レベルサンダー》を発動！私の場のモンスターの合計レベル×100の効果ダメージを相手に与えるであります！」

ライフ2400が一気に削られる。

「ふん、どうしたでありますか？少しは反撃してくれなければ授業にならないのでありますが」

確かに《古代の機械巨人》の攻撃は防がれた。それでも自分の場には3体の《古代の機械巨人》が顕在。

どちらにしても次のターンに雪姫が《古代の機械巨人》の攻撃を一斉に受けることに変わりないのだ。

しかし——雪姫にはそんなこと関係無かった

「私のターン、ドロー」

確かに雪姫のライフは残り1400で対するハイトマンはライフ4000でフィールドには3体の《古代の機械巨人》。だがハイトマンは手札も伏せカードも無く、雪姫は2枚の伏せカードと伏せモンスター。

実質追いつめられたのはハイトマンだ。

遊星やアキ、龍可といった上位のデュエリスト達は内心ではそう確信していた。

「私は手札から《光霊使いライナ》を召喚」

御願い。任せてください！雪姫はフィールドに現れたライナと一瞬のアイコンタクトを走らせる。

「おやあ？流石は落ちこぼれであります！まさかりバースモンスターを攻撃表示で「私は《メタモルポッド》を表側攻撃表示に変更」「ちよ」効果により互いの手札を全て捨て、デッキからカードを5枚

ドロー」

だがそれによってハイトマンにも一気に手札が舞い込む。

「ふ、ふん！態々手札を増やしてくれるとは「装備魔法《進化する人類》を《光霊使いライナ》に装備。元々の攻撃力を2400にします」「まだまだ届かないで」「罨カード《地霊術・「鉄」》を発動。《メタモルポッド》をリリース。デッキから《E・HERO クレイマン》を特殊召喚」今更そんなー「更に手札から装備魔法《戦線復活の代償》を発動。フィールドから《E・HERO クレイマン》を墓地に送り、墓地から《セカンド・ブースター》を特殊召喚」ふん！無意味でありますね」

何度も言葉を遮られて涙目になりながらも、ハイトマンは余裕の態度を崩さない。

確かに、《光霊使いライナ》と《セカンド・ブースター》の攻撃力では《古代の機械巨人》には太刀打ちできない。

そう。攻撃力では、だ。

「《セカンド・ブースター》の効果発動。《セカンド・ブースター》をリリースすることでフィールドのモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで1500ポイントアップ。私は《光霊使いライナ》を選択」

「んがつ！？」

ライジング・エナジー

「そして罨発動。手札を1枚捨てて《光霊使いライナ》の攻撃力を1500ポイントこのターンのエンドフェイズまでアップ。私は手札から《深淵の暗殺者》を捨て、効果により《メタモルポッド》を

手札に加えます」

更に間髪いれない罫カードの発動。しかもそのコストを利用して《メタモルポッド》を手札に戻すというおまけつきだ。その一連の流れ、そして一手一手の迷いの無さに遊星は目を見張る。

ましてや彼女は先ほどから殆ど逡巡する事無くデュエルを進めている。

手札交換を挟んでいるにもかかわらず、だ。

「すげえ！攻撃力800のモンスターがあんなになっちゃった！」

驚く外野達を他所に、《光霊使いライナ》の攻撃力は遂に《古代の機械巨人》を超えて攻撃力5400まで上昇する。

だが例えそれで1体の《古代の機械巨人》を破壊してもギリギリでライフは残り、ハイトマンのフィールドには更に2体の《古代の機械巨人》が控えている。

次のターンで攻撃力の下がった《光霊使いライナ》を攻撃すればそれだけでハイトマンの勝利である。

「バトル。《光霊使いライナ》で《古代の機械巨人》を攻撃」

だが雪姫はその目論見をあっさりと打ち破る。

「ダメージステップに《オネスト》の効果を発動」

「なんですとおおおお！？」

眩い光と共にライナの背に輝かしい光を放つ翼が現れる。

ライナはその翼を翻し燐光を散らしながら空へと舞い上がる。

その姿は正に宗教画に描かれる『神』そのもの。

圧倒的光の奔流はその余波の身でさえ《古代の機械巨人》を後退りさせる。

光はライナの眼前に集約し、太陽をも翳ませる光球となる。

そして放たれるライナの攻撃――

「ゴッドノウズ！！」

「蹴ったああああ！？」

「――ってあの人、あの流れでネタに走った！？」

超次元サッカーなシュートによって放たれた莫大な光の洪水が《古代の機械巨人》を、否それだけに留まらずハイトマンや他の《古代の機械巨人》さえをも飲み込んで行く。

それはそうだ。これを止めたいなら神を超えた魔神でも連れてこないといけない。

誰かフランクか迷宮兄弟連れてこい。

因みに作者はこのシュートが一番お気に入りである。異論は認めるが聞く耳もたん。

「……大丈夫だね、たかが5400のフィールだし？カイザーなんて5000とかいってたし大丈夫だね？」

何処か呆然とした様のハイトマン。無理もない。攻撃力3000の《古代の機械巨人》が僅か攻撃力800のモンスターの一撃で叩き伏せられたのだ。

「……」

「うん？なんだ、物好きだね」

そんな彼を見つめる雪姫の表情で何がしたいのか分かったのか、アウスはいつものシニカルな笑みを少しだけ優しいものにする。

「教頭先生」

「……私を笑いに來たのでありますか？」

「《古代の機械巨人》は——レベルが高いから強いんですか？それとも教頭先生のデッキに入っているから強いんですか？」

雪姫はそれだけ言うとツァンの方に歩いていく。充分だろう。彼に近づく遊星の姿が見えたから。

思えば、彼はいつしかデッキを通して《古代の機械巨人》の力を引き出す事をしなくなっていたかもしれない。

それこそフィールドに出ただけで《古代の機械巨人》使いを気取る様になっていた。

何故、忘れていたのだろう。

《古代の機械巨人》が強いのはレベルが高かったからではない。それを引き出すデッキを自分が試行錯誤しながら組み上げたからだった筈だ。

「それが……リリースする『しか』で、ありますか」

《古代の機械石像》も《古代の機械巨人》も同じくらい大事なデッキのキーカードだった筈なのに。

このデッキの1枚1枚は自分が信じて闘ってきた自分にとっての否、デュエルアカデミアの教師にとっての魂だったというのに。

そして拳句に教師である自分が子供たちの力を引き出すことさえも忘れてしまった。

「思い出すのが、少し遅すぎたでありますね」

ハイトマンは自嘲する。全く度し難い。これではデュエリストである以前に教師でさえ無いではないか。

「そんなことはない。あんたはカード、そして生徒達との絆を思い出した筈だ」

「不動遊星……」

そんな彼に静かに語りかける声があつた。本来は彼とデュエルする筈だったのだが、恐らくは勝てなかっただろう。

フォーチュンカップの優勝者だからではない。あの、自分にデュエルを挑んできた時の声。あれは本当に生徒達が屑などではないと、そして必要なカードなど無いと信じる声だったから。

だが今こうしてハイトマンに語りかける声はその時とは違い穏やかに、諭す様な声色だった。

「あんたが過ちを認め立ち上がる限り、カードとの絆は共にある。そしてあの子達との絆も……遅すぎるなんてことは無い」

或いは彼はハイトマンさえも信じているのかもしれない。きつと雪姫の言葉で変わる事が出来た筈だと。

案の定、遊星がハイトマンに何事かを語りかけている。ハイトマンの表情もまるで憑き物が堕ちたかのように穏やかになっているしもう大丈夫だろう。

「……」

唯、ツァンに対してポーカーフェイスに少しばかり恨みがましい色が混じるのは仕方があるまい。

「うつ……いいじゃない。嫌味な教頭も改心して、あんたもしつかり勝ったんだから」

「そうだな。お前とのデュエルでハイトマンも何かを感じたようだ」
いつの間にこちらに来たのだろうか。雪姫の勘は、一時期のサバイバル生活によって野生動物並みだと言うのにまるで気づけなかった。

流石はリアリスト――

それはともかく、雪姫には遊星の言葉が少しだけ嬉しかった。どうやら自分のデュエルでも人の心を動かす一助となれた様だから。

「ふ、不動遊星!?!」

「ツァンちゃん、初対面。失礼しました、不動さん」

「いや、俺の事は呼び捨てで構わない。敬語も別にいい」

（そんなポーカーフェイスでフランクなことを言われても）

『お前が言っな』と突っ込んだそのあなたは多分正しい。

「そ、そう?じゃあ遠慮なく……ボクはツァン・ディレ……ってさ

つきのは流石に失礼だったわね」

「小鳥遊雪姫です。私は却って落ち着かないので敬語で」

2人のやり取りに遊星は少しだけ表情を綻ばせる。

「……それにしても凄いコンボだったな」

内2枚はあなたのカードです、とは言わなかった。こちらではマニアクではあるが普通に手に入るカードらしい。

「そうでもないですよ。割と遊星さんのデュエルも参考にさせてもらいましたから」

実際、雪姫のプレイングには遊星のプレイングを参考にしている点が多い。

特にリリーフエスケープやカードコストを利用した墓地肥しを比較的によく使うのは、遊星のプレイングのなるべく無駄を作らないカード展開を基にしたものだ。

「それにしても変わったデッキだな。傾向が見えづらい」

「ただの《E・HERO》です」

まあ純正とはとても言い難いがここだという事でもないだろう。

「だから下級モンスターの扱いは彼女の方が上だと思いますよ？私と違って純正の《六武衆》ですし」

ローレベルメイン。妨害が得意。墓地利用バンザイ。大量展開バンザイ。シンクロバンザイ。

なんだかとても遊星が好きそうなデッキではある。

「そうか。ツァンのデュエルも見てみたかったな」

そうですね。ライフ4000で使っていていいかどうかは激しく疑問ですが。雪姫は心の中で呟いた。

遊星が去った後、アキが何とも言えない表情でこちらを窺っている事に気がついた。

「十六夜先輩……でしたよね」

無論確認せずとも知っているが、そこはそれである。

「あら、私の事を知ってるの？」

「有名ですから。それに遊星さんも名前呼んでましたし」

「遊星……さん」

「他の女の呼び捨てで動揺……青いのう？」

「最早何キャラですか、ウィン……」

見知らぬ女生徒が遊星を名前で呼んだのが引つかかったようだ。そんな初対面でさえも分かりやすいアキの反応に、ウィンが謎のキアラに覚醒。エリアが珍しく呆れ顔になる。

「……心配しなくても盗りませんよ。と、いうか流石に15歳相手は遊星さんのマーカーが増えてしまいますね」

「なあ！？」

何故ばれたのかと言わんばかりのアキの反応だが……

正直アニメ知識など無くてもバレバレであった。

と、言うか遊星が彼女の態度を見てまるで気づけないことが本気で不思議だった。

もっとも彼女の向こうでの親友に言わせれば彼女も似たようなものであるうが。

「……うん。なんかよくわからないけど、それに関してはそいつが正しい気がする、なんとなく」

「……酷い」

ツアンと雑談している雪姫を見て龍可は最初にあつたころの遊星を思い出していた。

無口で冷静、無表情で何処か冷たささえ感じられる端正な容姿。

特にデュエル中は本当に最低限にしか話さない。

たまにそれ以外でしゃべればかなり辛口。

だというのにその方が寧ろセリフ量が増える。

成程、共通点は多そうだ。特にデュエルのプレイング傾向は似ている。

或いは実際に遊星のデュエルを参考にしているのかもしれないが。

「すげー！！！！見たかよ、龍可！攻撃力8400だって！攻撃力3000のモンスターを一撃だぜ、かつちょいー！！俺もああいうデュエルやりたいなあ」

だからラジオンやラジカツセン軸で組めと何度も（ry

ついかにライフ4000なんだからボードンを一回くらい使えと（ry
むしろビデオンをもっと上手く使えと（ry

ライフ4000の世界で、何故ディフォーマーで1キルが出来ないのか小一時間（ry

「あのねえ龍亜——」

言おうとして止めた。

龍可は溜息を吐く。確かにそれも凄かったが他に幾らでも見るべきところの、そして参考にすべきところの多いデュエルだったろうに。

特に死に札を作らない隙の無いプレイングは遊星に近いものを持っている。

あの爆発力の裏には実直なカード回しと堅実なデッキ構築あってこそ、だろう。

しかもクレイマンを出したという事は、デッキは種類こそわからないが《HERO》。

それをキーパーツも碌に使わずに勝利したということ。

現に遊星やアキは寧ろそちらに驚いていたようだ。事実学生、それも話では今年からの編入組のプレイングではない。

とはいえ初等部にはそこまで見ている生徒などほとんど皆無なようだが。

（この前のダークシグナーとのデュエルで少しは成長したと思ったのに……）

どうやら龍亜が遊星やジャックと肩を並べる程のデュエリストになるには、まだまだ道は険しいようである。

まあ、かく言う龍可とて彼女の連れている精霊達が気になってしょうがないのだけれど。

（しばらく遊星の顔を見れないかも）

そしてそれもまた仕方ない。仕方が無いのである。

「ところで授業は？」

「あ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7268s/>

遊戯王 霊使いの一存、HERO達の憂鬱

2011年6月16日22時18分発行